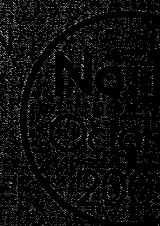




TOKYO GARIOA FULBRIGHT ALUMNI ASSOCIATION

ガリオア・フルブライト東京同窓会

NEWSLETTER



2001年度 東京同窓会総会・懇親会

～新時代の国際文化交流～



ガリオア・フルブライト東京同窓会
〒102-0084 東京都千代田区二番町11-10
TEL: 03-3221-1841 FAX: 03-3238-0758



ガリオア・フルブライト東京同窓会2001年度総会及び懇親会は、さる4月13日(金)、東京有楽町の東京會館で開催されました。

今年の総会には63名の会員、家族が出席。また当日は、日米教育委員会関係者等7名が列席されました。引き続き行われた講演会、懇親会ともになかなかの盛況で、年次、留学先を越えてダイナミックに交流を深めた同窓の集いでした。

総会では、小中陽太郎Alumni Meetings委員長が開会を宣し、議事に入りました。

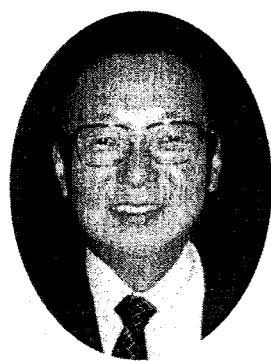
皮切りに太田隆次事務局長より、会務報告が行われ、さらに、原田敬美監査役より、添付監査報告書の通り監査報告が行われました。また金子会長より4月13日付で、太田隆次事務局長の後任に正野敏夫氏を任命することが報告されました。

総会の後、日比谷潤子氏(慶応義塾大学助教授)(U. of Pennsylvania Linguistics, Theory 1983)(Alumni Meetings委員会副委員長)による「私の英語教育論」と題する講演があり、その後参加者から英語教育についての熱心な質問等もあり会場が熱気につつまれ、楽しく自由なディスカッションがくりひろげられました。

会長挨拶

金子尚志 KANEKO, Hisashi

1960年 U. of California Berkley Communications Engineering



昨年4月21日の総会に於いて、橋本前会長の後任としてガリオア・フルブライト東京同窓会会長を勤めるNECの金子尚志でございます。'60年California大学Berkeley留学のフルブライターでございます。本日は大勢の同窓会メンバー各位

にお集まり頂き誠に有り難うございます。

後程、太田事務局長から会務報告がなされますが、私からこの1年間の経緯をかいつまんでご報告申し上げます。

本年も、何回かフルブライト留学生の歓送迎会が行われましたが、来日フルブライターの為の成田出迎え、最高裁判所見学会や、宇都宮ツアー等、同窓会会員各位にご尽力いただきましたことを厚

く御礼申し上げます。10月16日には恒例の日米交流チャリティー・ゴルフ大会が、牛尾治朗・Bob Grondine両co-chairの下で159名の参加者を得て開催され、約500万円の収益金が財団に寄贈されました。

もう一つ私からご報告しなければいけないことは、50周年の記念個人募金であります。来年はフルブライト制度発足から50周年に当たる為、現在50周年記念事業実行委員会(賀来委員長)が発足し、既に3回の講演会を開催し来年には記念式典(5/25、26)を計画しております。さらに、来年は全国同窓会による5年毎の個人募金の年に当たります。先般の同窓会役員会で論議され、先刻開催された全国理事会でご了承いただき、「フルブライト50周年記念募金」を記念式典に間に合わせて挙行することになりました。(従って、今回は式典があるため、前回より実質的に1年前倒しになっていることをご理解賜りたいと思います。)

尚、折しもサンフランシスコ平和条約締結50周年記念事業の一環として、A50事業実行委員会(大河原良雄会長)により募金活動が進行中であり、この内奨学金引当額は財団法人日米教育交流振興財団に寄託され、「A50フルブライト奨学金」として、米国からの留学生招聘に寄与する事になっております。米国の友情に感謝することではA50事業とは同じ志を共有するものであり、本個人募金もA50事業との協調関係に於いて取り進められますことを御承知置き頂きたいと思ひます。

ホスピタリティ委員会の活動報告

1. 宇都宮旅行

島田道子 SHIMADA, Michiko

1957 U. of Minnesota American History (Hospitality委員会 副委員長)

宇都宮旅行も今回で12回目を迎える。今年は家族連れが多く、幼稚園児から成人の子供6名を含む総勢18名であった。

昼近く宇都宮に集まり、例年の如く「いっくら」の会員に迎えてもらい、会席料理の昼食会が行われた。日本料理紹介もあって会席料理であるが、値段や菜食者の不満など過去にあったため、今回は同窓会もちになった。そのせいかわから



ないが好評だった。

午後は裏千家茶道教授の斎藤宗琢氏のお宅に伺い、本格的茶室や茶庭をみながらお茶をいただいた。その後2階の広間で夫人の日本舞踊をみせていただいたあとは自由におしゃべりを楽しんでもらった。

2日目はチャーターバスで日光へ行った。自然博物館での映画「悠久の日光」は、いながらにして日光の四季をみることができ、大変好評であった。

昼食後、大猷院、東照宮を見学、大猷院では、



50年毎にしか公開されない家光の墓がある奥の院にも行くことができた。

3日目は益子へ行き、江戸時代から続く監染の工房を見学し、焼き物工房や立派な日本屋敷をもつ関沢陶芸の日本庭園やお座敷を見学させてもらった。

フルブライターは「いっくら」の会員の家に2晩ホームステイをしたが、ホストファミリーの暖かいおもてなしに、全員大満足していた。

最後の日は、その夜同窓会主催の歓迎パーティーがあるので、午後は帰京の時間にまわさざるを得



なかった。せっかく益子に来たのだから、もっと買い物をゆっくりやりたかったという声が多かったので、来年はこの点を考慮しなくてはいけないと思った。

1日目は雨だったが、あとの2日は晴天に恵まれ、フルブライター一同とても楽しかった、素晴らしい思い出になったというコメントをもらい、お手伝いした者として、とてもうれしかった。

2. 出迎えサービス

太田 隆次 OTA, Ryuji

1967 U. of Wisconsin Labor & Industrial Relations (ホスピタリティ委員会委員長)

1989年からの成田空港での「出迎えサービス」は、2001年7月31日現在で述べ130名のアメリカングランティーを出迎えました。家族同伴の方も多いため実際はもっと多くなります。成田空港は東京から遠いこともあって、出迎えは成田市在住の方々を中心に、千葉県下に在住の東京フルブライト同窓生と家族のボランティア活動によるものです。

出迎える時は、航空機が到着して15分位してから、GARIOA FULBRIGHTのロゴマークの入った出迎え専用のプラカード(大日本インキ化学工業株式会社で1989年に作成、ご寄付して頂きました)に、到着するアメリカングランティーの名前を書いて、手に持って掲げます。JUSECから予め写真を頂いているのですぐ分かりますが、大抵の場合、プラカードが目立つのか先方が先に見つけて喜喜満面走り寄ってきます。出迎える側がほっとする瞬間ですが、出迎えられる側がもっと、ほっとする瞬間でしょう。

誰しも、初めて訪れる国の空港での不安は、重



い荷物を持って第一日目の宿泊先に無事に行けるかということです。普通の旅行者と違うのは、アメリカンフルブライターは、パソコンと研究のための資料、書籍類が多いことです。それでも東北や大阪など遠方や急がない荷物は空港から宅配便で送ってなるべく身軽にしたり、ホテルに直行するバスに乗せたり、万一の場合の連絡先を教えたりしています。

第一日目の宿泊先が都内ホテルならいいのですが、聞いたこともないような名前の宿泊先（〇〇ゲストハウスのように）の場合は、確かに存在するかどうかが不安なので、次のボランティアがタクシーに乗せて届けることになります。知人宅といっても予め電話して在宅時間を確認しておかねばなりません。

到着した翌日は、恒例に従ってJUSECでオリエンテーションがあるので、電話で無事を確認するようにしています。

このように出迎えサービスは神経を使いますが、アメリカンフルブライターの日本での第一日目がうまく行くように願っています。

3. アメリカンニューグランティ―歓迎会

恒例の、その年に新しく来たアメリカングランティ―の歓迎会がグランティ―と家族、冠企業、日米教育委員会、同窓会員など79人が集まって、2000年11月22日に、昨年と同じ六本木プリンスホテルで開かれました。

金子会長から歓迎の挨拶、シェパード日米教育委員会事務局長の挨拶の後、各グランティ―から日本語あるいは英語で自己紹介をして頂きました。

なかには、大変ユーモラスな自己紹介もありました。

いつものことながら、このアメリカンニューグランティ―歓迎会では、アメリカングランティ―だけでなく、日本人同窓会員の久しぶりの再会やガリオア時代の古い同窓会員から、若い同窓会員への思い出話の披露、同窓会事務局への意見、注文など多目的のにぎやかなパーティーで盛り上がりました。

2001年度も計画していますので、日時、場所が決まり次第、同窓会員にご連絡いたします。多数のご参加をお待ちしています。

4. 最高裁・国会見学

高澤 廣茂 TAKASAWA, Hiroshige
1996 U. of Utah Social Deviance/Criminology (副会長)

例年通り本年も又標記見学が最高裁判所当局及び津島雄二衆議院議員（1955 Syracuse U.）の御好意により実施された。

1. 日時、日程参加者等は次の通りであった

日 時：2001年5月31日（木）午後
1時30分～3時30分 最高裁判所
3時45分～5時20分 国会

参加者 グランティ―及びその家族12名
同窓会役員等4名
JUSEC職員1名

2. 最高裁見学

- 1) 例年通り千種秀夫裁判官（1961 Southern Methodist U.）を表敬訪問し、同裁判官から御挨拶があった。
- 2) 会議室においてまずビデオ（英語）による日本の司法制度、組織構成、裁判官、その他の裁判所職員などに関する解説があり、引続き最高裁に派遣されている東京地方裁判所裁判官による質疑応答が1時間程行われた。
- 3) 次に大法廷、小法廷、図書館、特別研究室等の見学が続いた。
裁判官室に千種裁判官を表敬訪問し、10分足ら



ずとは云え簡単な問答の機会を得たことは印象に残った模様である。

3. 国会

- 1) 英語による衆議院本会議場、御座所、塔部直下のホール等の案内、解説があった。
- 2) 本年は日程の関係で津島議員との例年の如き面接講話拝聴の機会はない旨予め秘書官から連絡を受けていたが、見学開始前一同控室にいたところ突然津島議員本人が現れ、流暢な英語で20分位応対して下さった。
- 3) 御座所の装飾品等を含む工費が総工費の1割を占めているとの説明に対しては、毎回のことながらグランティ―の関心が高かった。

これ等の見学には、司法部、立法府に対する百聞は一見に如かず的なPR効果があったように思われた。

=事務局からのお知らせ=

●現在ホームページを改訂中です。皆様にご覧いただき「アドレスがわかりにくい」「こんなページを作ってほしい」などのご意見・ご感想をぜひ事務局までお聞かせください。また住所変更などのお知らせにもぜひEメールをご利用ください。

ホームページアドレス：

<http://www.d3.dion.ne.jp/~fulbreite>

e-mailアドレス：

fulbreite@d3.dion.ne.jp

●ボランティアでアメリカンフルブライター成田出迎えをしていただける方を募集しております。ご興味のある方は事務局宛ご連絡ください。お待ちしております。

TEL：03-3221-1841

FAX：03-3238-0758

2001年度総会での各種報告

2001年度役員

- 会長：金子尚志
- 副会長：南原晃(会長代行) 佐藤ギン子 有馬朗人
小西輝明 松原亘子 高澤廣茂 白鳥正喜
- Alumni Meetings 委員長：小中陽太郎
副委員長：日比谷潤子
- Hospitality 委員長：太田隆次
副委員長：島田道子
担当副会長：高澤廣茂
- Publicity 委員長：加藤幸男
- Administration 事務局長：正野敏夫
- 監査役：原田敬美

2000年度募金データ

企業名	金額(単位:千円)
A50	63,520
JEF	7,359
三菱グループ	5,000
トヨタ自動車	5,000
YKK	10,000
東京チャリティゴルフ	5,528
個人寄付金	1,070
合計	97,477

2000年度決算 金額(単位:円)

収入の部		支出の部	
前期繰越	17,718,621	旅費交通費	65,863
会費	5,132,735	通信費	1,191,513
寄付金	18,000	印刷製本費	474,106
受取利息	38,794	什器備品費	58,009
募金手数料	1,178,775	修繕費	0
PC賃貸料	240,000	消耗品費	0
		地代家賃	288,685
		会合費	-91,603
		倉庫料	144,000
		事務用品費	73,586
		給料手当	3,241,182
		奨学生費	267,710
		支払手数料	12,095
		図書購入費	1,380
		会議費	53,550
		雑費	15,750
		予備費	0
		合計	5,795,826
合計	24,326,925	次期繰越	18,531,099

2000年度会務報告

- 00.04.21 2000年度総会及び懇親会(於東京會館)。講演者：堀田凱樹氏。
出席者：会員51名、シルバー会員34名、その他15名、合計100名。
- 00.05.12 アメリカ人フルブライターの為に最高裁判所及び国会の見学会。
参加者：18名(フルブライター8名、その他10名)。
- 00.09-10 アメリカ人フルブライターを成田空港に出迎え。
- 00.10.16 第25回日米交流チャリティ・ゴルフ大会(於戸塚カントリー倶楽部)。
参加者：159名。募金額：約500万円。
- 00.11.20-22 アメリカ人フルブライターの為に宇都宮ツアー(日光東照宮、益子焼など)2泊3日。参加者：17名。
- 00.11.25 アメリカ人フルブライターの歓迎会(於六本木プリンスホテル)。
出席者：会員41名、グランティアー12名、その他26名、合計79名。
- 00.12 NEWSLETTER No.13を発行。
- 01.02.22 フォーリー駐日大使送別レセプション(於ホテルオークラ)。
出席者：会員33名、その他13名、合計46名。
- 01.03.07 東京同窓会役員会。

2001年度予算 金額(単位:円)

収入の部		支出の部	
前期繰越	18,531,099	旅費交通費	113,000*
会費	5,000,000	通信費	1,296,000*
寄付金	34,000*	印刷製本費	475,000
受取利息	44,000*	什器備品費	250,000
募金手数料	1,051,000*	修繕費	10,000*
PC賃貸料	240,000	消耗品費	5,000*
		地代家賃	288,685
		会合費	-86,000*
		倉庫料	144,000
		事務用品費	147,000*
		給料手当	3,421,000*
		奨学生費	280,000*
		支払手数料	14,000*
		図書購入費	9,000*
		会議費	102,000*
		雑費	68,000*
		予備費	500,000
		合計	7,036,685
合計	24,900,099	次期繰越	17,863,414

*2000年度の予算と決算を足して2で割った金額

慶應義塾大学助教授

日比谷 潤子氏

講演趣旨



日比谷 潤子氏

私の英語教育論

—英語第二公用語論をめぐる—

日比谷潤子でございます。

私は1983年から4年間、ペンシルベニア大学言語学科におりました。そこで勉強したのは社会言語学で、この分野は言語の多様性を研究します。身近な例で言いますと、日本の国内でどこか他のところへいっしょと、人々が話している言葉はかなり違う。今はそれほどでもなくなりましたが、職業による違いもあります。男女の言葉も違う。このように、一口に日本語と言っても、実態は多様です。これは英語でもそうですし、世界中のすべての言語がそうです。こういう言語の多様性を、一つはマイクロレベルで、例えばある人の話し方が相手によってどんなふうになるか、あるいは非常に興奮した時にはどういう特徴が出るか、といったようなことを調べる研究。それから、マクロレベルで、少数言語を復興させるためにはどうしたらいいかという研究もあります。

この分野が最近社会的に注目を浴びたのは、カリフォルニア州で「エボニックス論争」という大変な騒ぎが起こった時です。エボニックスというのは、アフリカ系アメリカ人が日常語として使っている英語のことで、いわゆる標準英語とはかなり違います。このような日常語で育った子供たちが小学校に入った時に、読みの能力等の面で生じる問題をどうしたものかというので、議論が紛糾しました。この時米国の社会言語学者が非常に積極的に発言しましたが、とりわけ積極的だったのがスタンフォード大学教授のリックフォードです。

この人はペンシルベニア大学言語学科の先輩で、指導教授も同じでした。研究成果を社会に大きく還元したと言えます。そこで今日は、ご案内では

「私の英語教育論」というタイトルになっていますが、この先輩を見習って、英語教育に関連する話題で、最近日本で大いに物議をかもした問題について、社会言語学の立場からお話ししようと思います。

その問題というのは、英語第二公用語論です。これは小淵元首相の私的懇談会から出てきたもので、戦略的によく考えて「第二公用語」という言葉を使い、人々の関心を引いた。その結果、それだけが一人歩きしているという感があります。けれども公用語が何かということについて、一般の日本人がそれほどよく分かっているわけではありません。それによって、様々な誤解もあったかと思っています。

そこでご存知の方にはわざわざ説明するまでもないのですが、公用語とは一体何か。「国家やある地域の行政府、または公の団体等が正式に使用する言語で、教育・放送・会議・公文書等に用いられる」と定義されています。

例えばベルギーにおけるフラマン語・フランス語、スイスの4言語、それからインドでは、連邦政府全体としてはヒンドゥー語を公用語に指定し、多民族ですから、その他に地方ごとにベンガル語やウルドゥー語等、合計13言語を公用語に指定しています。さらに植民地だったという事情があるので、共通語として、今日の話題でもある英語も広く使われています。これらの地域では、それぞれの言語を母語としている人々がいます。逆に言うと、公用語はその地域の誰かの母語である。そしてその人数は少なくない。

ところがちょっと違うケースもあります。例え

ば、シンガポールでは、現在四つの言語を公用語として指定しています。マレー語、それから華語と呼ばれている中国語、タミール語、そして英語です。マレー語はマレー系の人々の母語です。現在のシンガポールでは、人口の約15%がマレー系です。一集団の母語で、その人々がかなりの割合を占めているから、その言語を公用語にしたというわけです。華語は、標準中国語と言ったらいいかと思いますが、シンガポールに住んでいる中国系の人々は全体の80%弱です。この人々の共通語として華語を推奨しているのです。しかし、中国系は福建省や広東省から渡った人々が多いので、多くの人の家庭語は福建語、広東語、客家語等で、華語が非常に推奨されていますが、実は誰の母語でもないのです。それからインド系の人々は6%ぐらいですが、このインド系を代表する言語としてタミール語が公用語に指定されています。但し、シンガポールにタミール語を母語とする人々が固まっているということでは全くありません。加えて、英語が広く使われていて、これは「シングリッシュ」と言われることもあります。先ほどのインド英語と一緒に、アジアの多くの地域は、独自の英語をそれぞれ発達させています。英語は国の経済発展に役立つし、世界中のコミュニケーションの道具でもある。

もう一つ、シンガポールのような国の場合、英語を公用語、その中でも最も優勢な言語として奨励するには、民族間の融和を図るといふ目的もあると言われています。相互のコミュニケーションの手段として、例えばマレー語を選ぶという選択肢がないわけではありませんが、そうするとこのグループを優遇したような感じになってしまいます。たくさんの民族集団



がいるところなので、それはまずい。

日本には英語を母語とする、まとまったグループがいるわけではないし、英語を選ぶことによって、言語グループ間の関係を融和しなければならないという状況でもない。「英語を公用語にしよう」というのは、通常の公用語の意味とは離れた言葉の使い方だった。

さらに、「第二公用語論」と言われますが、「第一」があるから「第二」と言います。日本には第一公用語というものはありません。公用語の定義にあるような役割を果たしているのは、日本語ですが、日本語が第一公用語であると言う必要はあまりない。第一がないのに第二と言っているのも、奇妙です。

今の日本で、公用語を指定するような動きがあるとは思えませんが、先ほど申しましたように、政府が正式な文書等で使う言語が公用語であり、国内にいる様々な民族の権利を保護したり、行政上の便宜をはかるために官公庁においてその使用を定める。ですから、韓国語（朝鮮語と言ったり、ハングル語と言ったりもしますが）あるいは中国語を公用語とするなら、本来の公用語の定義にあっている。けれども英語を第二公用語にしようというのは違うのではないかと。

世界各地のケースについて駆け足でみてまいりましたが、「あの国の話をしないなあ。」と思っていられる方がおいでになるかも知れません。最後に二つの公用語を制定しているカナダについてお話しします。

カナダは、バイリンガリズムを提唱しています。英語とフランス語が公用語になっているのは、建国の二民族という言い方をよくしますが、その二民族の言語である。しかし、

文化的にはマルチカルチュラリズムを標榜しています。そもそも建国の二民族と言っていますが、英語系、それからフランス系の人々が行くまで、誰もいなかったわけでは、もちろんありません。先住民がたくさんいた。その言語もあれば文化もあります。それからカナダは、ご承知のとおり移民国家ですから、日系も含めて、建国の二民族以外のところから来た移民とその子孫もたくさんいます。よくアメリカでは人種のるつぼと言いますが、カナダはそれに対してモザイクを目指している。つまり、それぞれの特徴を生かしながら、多文化の共生を図ろうという考え方です。言語についても、公用語が二つあるということに加えて、例えば日系であれば日本語といった、祖先から受け継いできた言語を勉強したいという要請が、そのコミュニティから出てきた時に、予算をつけて授業するというような努力を行っています。

最後に、二つの公用語をめぐる最近の動きについてお話ししたいと思います。

フランス語系住民が圧倒的に多いのは、もちろんケベック州です。そこで英語系の人々がフランス語をどのくらい勉強しているか。逆にケベック州に住んでいるフランス語系の人々が英語をどのくらい勉強しているか。ケベック州在住の英語系の人々は、フランス語を勉強しそうなものです。周りにはみんなフランス語で動いているわけですから。ところが1921年と1961年のデータを見ると、そんなことは全然ない。同州在住のその他の人々、例えばイタリア系とか中国系の人々も、フランス語ではなく英語を勉強していました。逆にフランス語系住民は、特に1921年の段階では英語をよく勉強していた。これはなぜか。ケベック州は、数の上での多数派はフランス語系ですが、経済的な力を持っているのはむしろ英語系の人々で、フランス語系の人々にとって英語を学ぶことには経済的な利益があったのです。英語系の人々は、ケベック州に住んでいるからといって、一生懸命フランス語を勉強してもあまり意味がないと考えられていました。特に戦前はそうです。1961年にはフランス語系で英語を勉強する人の割合が低くなるという変化がありました。その後、ケベック州の英語系住民はどうしたか。フランス語を勉強する割合がどんどん増え、1991年にはほぼ60%に達しました。なぜかという、最初は1969年に、2回目は1988年に公用語に関する法律が制定され、例えば政府が発行する条例や法律関係の文書等は、す

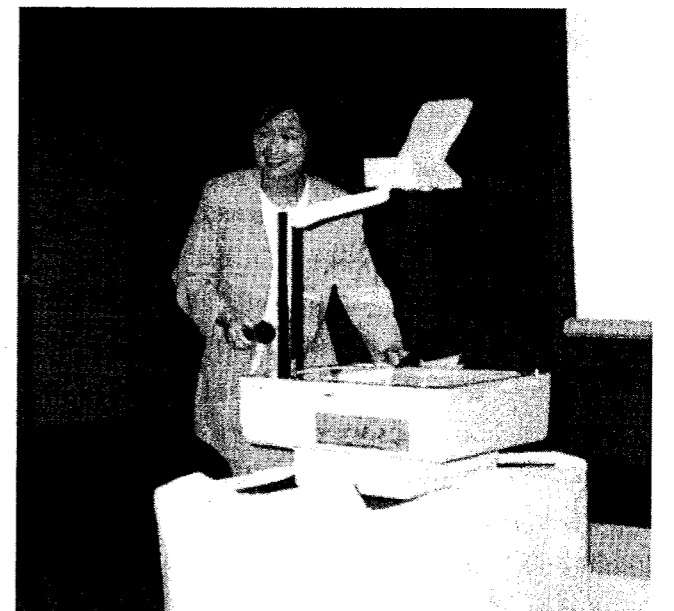
べて2か国語併記、国勢調査も2か国語併記というふうになりました。その時に公務員になるには両言語ができなければだめだというようなことも決められました。その結果、ケベック州在住の英語系住民にとってフランス語を勉強することに積極的な意味が出てきました。それでこのように増えてきたというわけです。

そろそろ私の持ち時間も終わりに近づいてきましたので、まとめますと、「英語第二公用語論」は、そもそも第二というのがおかしいし、いわゆる公用語の定義とも違います。

最後にもう一点、ああいう極端な議論が出ましたが、前後をよく読むと、国際語としての英語の地位が非常に大きくなってきているので、21世紀に向けて、日本が色々な国とコミュニケーションをとっていくためには、もっと真面目に英語に取り組まなければいけないという意思を、ああいう形であらわしたのだと受け取った方がいいと思います。

講演者 日比谷潤子氏プロフィール

- 1957年 東京生まれ
- 1980年 上智大学外国語学部フランス語学科卒業
- 1981年 上智大学大学院外国語学専攻言語学専攻博士前期課程修了（修士号取得）
- 1982年 フルブライト給費生として渡米
- 1988年 ペンシルベニア大学大学院言語学博士課程修了（Ph.D.取得）
- 1994年 ダートマス大学アジア研究プログラム訪問準教授
- 現在 慶應義塾大学国際センター助教授



My Eighty Years in Japan

by Simon Partner

早稲田大学国際教育センター訪問学者（現役フルブライター）

During my past twelve months in Japan, I have lived almost eighty years.

As a historian, I live in Japan both in the present and the past. The streets of Tokyo, with their crowds of blonde and brown-haired, nose-pierced, shop-gazing youths, echo with the presence crowds-modern girls sporting bobbed hair and slim dresses on the Ginza, straw-hatted devotees of the silent screen in Asakusa, townsmen and threadbare samurai jostling in the pleasure districts of Edo, and-for this has been a city of untold suffering-stiff-limbed bodies piled high from the conflagrations of the Kanto earthquake and the Tokyo bombings. Perhaps it was to escape from these everpressing ghosts that I decided to find out about another Japan, The 'quiet' Japan of the rural countryside, where at first glance much seems unchanged today from a hundred years ago, and where the ancestors sleep peacefully in the graveyards. Yet I have found that even the mountains and the rice paddies are peopled by ghostly crowds, clamoring for their brief and often tragic tragic stories to be told.

Much of my research during the past year has been on the life of Sakaue Toshié 坂上 としえ, a Niigata farmer who is now seventy-six years old. Toshié embodies both present and past. She has witnessed such profound changes that the Japan of her youth is barely recognizable to the youth of today. As a schoolgirl, she bowed every time she passed the 'hoanden' repository in which lay a photograph of the Emperor. She was taught of the glories of Japan's military conquests, and of need for sacrifice and absolute

obedience. For three decades she worked as a manual laborer, meagerly paid by the day for heavy hauling work on docks and river improvement projects. And in the early morning and evening, she hacked at her own tiny fields in order to keep her family fed and clothed. She lost both her brothers to the war, and she lived with the stigma and care of a mentally ill sister for more than forty years, with no medical care or public assistance available. She watched the young men leave her village, first for the war and then for the factories. Today she leads a life of modest comfort and pleasure. She has her annual vacation to Nikko or Okinawa. She spends her evenings watching television and gossiping with her friends of seventy years. A former tenant farmer, she now rents out her fields to a neighbor in exchange for a share of the crop. Her gentle voice, telling with simple resignation of experiences and hardships that are almost unimaginable to me, is a living testimonial to the incessant turmoil and change of the past century.

I became a historian of Japan by accident. Even today, I can't explain logically the sequence of events that has left me a chronicle of a country I never visited until I was thirty. But as I listen to the voices around me in the humid summer evenings-voices of both living and dead-then I feel strongly the need to tell these tales, before they are swallowed by the incessant surge of new life, and forever forgotten.

FMFプログラムの支援

●ここ数年来日本政府によってアメリカの小・中・高校の先生方を日本に招待して日本の先生方との交流をはかる、フルブライト・メモリアル・ファンズ事業が行われています。日本政府からこの事業を依頼されました日米教育委員会からは、フルブライト同窓会会員に対しまして、度々の協力要請がありました。これに対しまして、数多くの同窓会会員の方々が積極的にご協力下さいました。

●FMFからの協力要請は、“1. 参加者到着日の夕食案内”、“2. 20名グループとなつての各都市訪問行事のうち、訪問地での歓迎会、市庁舎訪問、小・中・高校及び大学訪問など4～5日の行程の各日にFMFの代表者の代わりとなつて行動し訪問先への挨拶”などをするの2点です。

●今までこれらの支援活動は、数年前に東京同窓会で会員に対して行ったアンケートの回答を基に、協力して下さいそうな方々100～200名に毎回お願いして参りました。今まで東京同窓会の事務局からFMF活動への協力をお願いをお受取りになられたことの無い方で、都合の合う時には協力してもよいというご意向のございます方は、Fax等でご一報いただければ幸いです。

●同期の人、専門分野の人、同窓会や専門分野会を企画されるグループの方には、できるかぎり資料リスト・ラベル等をお送り致します。ご遠慮なく同窓会事務局までご連絡下さい。

●同窓会事務局

同窓会事務局は地下鉄有楽町線の麴町駅のごく近くで、地下鉄半蔵門線の半蔵門駅からも5分位、JR四谷駅及び市ヶ谷駅からそれぞれ10分位の所にあります。お気軽にお立ち寄り下さい。

●フルブライト同窓会・財団・委員会の区別

フルブライト同窓生の多くの人にとって、右記の三つの組織の区別が分かり難いようですので改めてご説明させていただきます。

〈日米教育委員会〉

日米両国政府によって作られている組織で、フルブライト奨学生の選考と奨学金の支給をします。私達同窓生も皆お世話になった組織です。

現在の住所は東京の赤坂見附の近くにあります。

住所：東京都千代田区永田町2-14-2

Tel: (03) 3580-3240

〈フルブライト同窓会〉

(ガリオア・フルブライト同窓会)

かつてフルブライト（又は、ガリオア）奨学生だった人達を会員とするいわゆる同窓会で、全国11地区にそれぞれ地区同窓会が組織されています。全国的に関係のある問題、行事に対しては、地区同窓会の代表で組織されるガリオア・フルブライト同窓会全国理事会があって、東京同窓会が会長・事務局を兼ねています。

ガリオア・フルブライト同窓生の総数は約6,800人ですが、既に亡くなられた方や海外に居られる方を除いた実数は約5,000人で、そのうちの約3,000人が東京同窓会に所属しています。

東京同窓会の事務所は東京・麴町の日本テレビの近くにあります。

住所：東京都千代田区二番町11-10

Tel: (03) 3221-1841

〈フルブライト財団〉

(日米教育交流振興財団)

ご承知の通りガリオア・フルブライト同窓会では主としてアメリカからの奨学生の人数を増やすために、同窓生・企業から募金をしています。寄付者に税法上の便益が得られるように同窓会によって作られたのが、フルブライト財団（日米教育交流振興財団）です。

財団の事務局は東京同窓会と一緒にありません。

事務局便り

2000年度財団奨学生冠名リスト

採用者数： Fulbright Fellows (Recent B.A.)
 — F F 7名
 Graduate Research Fellows
 (Graduate Students) — G R F 4名
 Graduate Students—Japanese
 — G S J 1名

(Americans)

冠企業名	奨学生名	カテゴリー
1 J E F	TSENG, Alice Y.	G R F
2 J E F	FRALEIGH, Matthew P.	G R F
3 三菱グループ	GILBERT, Kristie L.	G R F
4 Y K K	BIRD, Rebecca F.	F F
5 トヨタ自動車	FLUECKIGER, Peter A.	G R F
6 志野基金	GAMMARINO, M. Thomas.	F F
7 九州同窓会	CHRISTIANSON, Nicholas.	F F
8 全国同窓会	WILLIAMS, Martin W.	F F
9 全国同窓会	EREMUS, Sarah R.	F F
10 全国同窓会	LOGAN, Suzanne M.	F F
11 全国同窓会	HARSTON, Katrina F.	F F
(Japanese)		
1 Y K K	館 美貴子	G S J

2001年度事業計画書

(単位：千円)

前年度予算額 本年度予算額

I 日本人派遣事業

日本人派遣事業合計 1名 5,000 1名 5,000

II 米国人受入事業

1 大学新卒生	7名	28,000	7名	28,000
2 大学院生	4名	20,000	4名	20,000
3 選考費		100		100
4 オリエンテーション費		150		150

米国人受入事業合計 11名 48,250 11名 48,250

事業費合計 53,250 53,250

50周年記念募金状況

この日の米フルブライト・プログラム50周年記念募金は、お陰をもちまして募金開始後約二ヶ月を経過いたしました現在までに、集計表のとおり、760人の方々から約18,790,000円のご寄付を頂戴し、募金活動は順調に推移しておりますことを、ご報告申し上げます。

今後とも本年末の募集期限までの間、募金目標額1億円達成に向け、なお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

50周年記念募金集計

(01.06.25～01.08.31)

(金額別：円)

金額	件数	合計
¥1,000,000	2	¥2,000,000
¥500,000	1	¥500,000
¥250,000	1	¥250,000
¥200,000	1	¥200,000
¥150,000	1	¥150,000
¥100,000	32	¥3,200,000
¥80,000	1	¥80,000
¥70,000	1	¥70,000
¥50,000	30	¥1,500,000
¥40,000	1	¥40,000
¥30,000	63	¥1,890,000
¥20,000	273	¥5,460,000
¥15,000	1	¥15,000
¥10,000	337	¥3,370,000
¥5,000	10	¥50,000
¥3,000	5	¥15,000
TOTAL	760	¥18,790,000

(金額別：ドル)

金額	件数	合計
US \$ 1,000.00	1	US \$ 1,000.00
US \$ 200.00	1	US \$ 200.00
US \$ 100.00	3	US \$ 300.00
TOTAL	5	US \$ 1,500.00

(同窓会別：円)

同窓会名	件数	合計
北海道	19	¥415,000
東北	26	¥1,000,000
東京	440	¥11,184,000
中部	42	¥908,000
北陸	9	¥190,000
大阪	117	¥2,540,000
中国	29	¥630,000
四国	7	¥190,000
九州	33	¥840,000
沖縄	33	¥413,000
海外	1	¥250,000
退会	2	¥120,000
逝去	2	¥110,000
TOTAL	760	¥18,790,000

高額寄付者 (敬称略)

100万円：三浦 健、八幡 恵介

50万円：高橋 剛夫

25万円：能美 和夫

20万円：川又 良也

15万円：林 弘子

10万円：隅出 昂伸、本田 正一、川平 朝清、長澤 光一、香西 理子、亀山 博子、磯部 朝彦、富田 岩芳、山本 博、伊勢亀富士朗、橋本 徹、若月三喜雄、開原 成允、宮川 圭治、苦米地英人、小原 望、木下 宗七、一條 和生、吉井 英一、竹内利枝子、岩野 一郎、南原 晃、後藤田輝雄、渡辺 彦憲、金子 尚志、上野田鶴子、山口 正俊、高向 巖、上田 功、上田 俊男、鳥羽 良明、堀江 昭

1000ドル：林 啓一郎

日米フルブライト・プログラム 50周年記念募金要領

募金要領

1. 募金目標額 金壹億円

2. 募金の目的と用途

日米教育委員会が実施している日米教育交流計画(フルブライト・プログラム)と協力し、日米相互理解推進に資するため「日米教育交流振興財団奨学金」として、主として米国人の留学生に支給致します。

3. 募金の方法

ガリオア・フルブライト同窓生より1口壹万円以上、可能な方はなるべく2口以上御願ひ致します。尚、壹万円以下のご寄付も喜んで頂戴いたします。金額壹万円を超える寄付金は非課税扱いとして確定申告の際所得からの控除が認められます。

4. 寄付金の払い込み方法

同封の振り込み用紙に住所、氏名、会員番号、御寄付額をご記入の上、郵便局より送金頂ければ、東京貯金事務センター経由で財団口座に振り込まれます。

払込先：口座番号 00160-0-121770

口座名称 財団法人 日米教育交流
振興財団

〒102-0084

東京都千代田区二番町11-10

5. 寄付金の所得控除

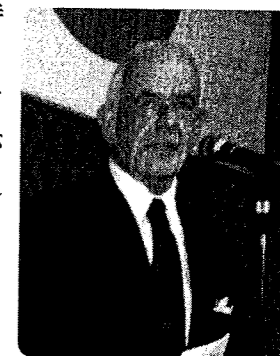
寄付金は同封の「特定公益増進法人であることの証明書」及び郵便局の「払込金受領書」(財団の正式寄付金領収書の代用)を確定申告時に税務署に提出すれば所得控除が受けられますので大切に保存して下さい。

6. 募集期限 2001年(平成13年)12月末日

フォーリー大使 送別レセプションについて

去る2月22日(木)6時半～8時半、ホテルオークラ別館メープルルームにてフォーリー駐日米大使が3年余りの滞在を終えられ帰国されるということでフォーリー大使送別レセプションが開催されました。

フォーリー大使は、大使として来日されて以来、フルブライト・プログラ



ムやガリオア・フルブライト同窓会関連の諸行事へご出席いただくなど多大な貢献をされてこられました。そのご尽力に対し感謝の意をこめての別れの会でありました。

送別レセプションは、日米協会、在日米商工会議所、アメリカ州政府在日事務所協議会とガリオア・フルブライト同窓会の日米関係に深く携わっている諸団体の共催で、盛大に行われました。

〈フルブライト財団〉(日米教育交流振興財団)の役員異動について

フルブライト財団は、主により多くのアメリカ人奨学生を日本に迎えるための募金活動を行っております。

この度、2001年6月29日開催の理事会および評議員会において、内古閑俊二新理事長、賀来景英新副理事長が誕生いたしました。

なお、前理事長の小西輝明氏と新しく選任された佐藤満秋氏はそれぞれ理事として引き続きフルブライト財団奨学生の選定・サポート等のお仕事をされることとなります。

理事長：内古閑俊二

副理事長：賀来 景英

理事：

嶋田 正	東江 康治	渡邊 宏
有江 幹男	小西 輝明	西島 安則
神原 胖夫	仁科雄一郎	比嘉 幹郎
三木 吉治	金子 尚志	隈出 昂伸
新堂 庄二	宮崎 誠也	青木 茂之
木村 榮一	佐藤 満秋	木下 宗七
神保 一郎	原口 三郎	牧野 信夫
今里 滋		

監事：

高向 巖	高澤 廣茂	小木野 一
------	-------	-------

同窓会への寄付金について

宮崎ま里様が同窓会宛に100万円をご寄付された他、下記の皆様から2000年度中に総額1,081,000円の寄付金をいただきました。御礼申し上げます。

宮崎ま里、桐山謙一、宮山牧子、大橋里枝、俣野一郎、古島 実、南原 晃、光岡 洋、伊原通夫、田中信正。

50周年記念募金へのご協力を

(新事務局長挨拶)

正野 敏夫
SHONO, Toshio
1962.63
Arizona State U.
Accounting



このたび太田隆次氏の後任として、東京同窓会の事務局長を勤めさせていただくことになりました正野敏夫です。どうぞよろしくお願いたします。

私はフルブライト・プログラムのおかげで、1962・63年アリゾナ州立大学で、会計学、統計学を学ぶ機会を得ましたが、同時に、寮の仲間やホストファミリーから、おおらかな心、フェアな競争、強い独立心など実に多くのことを教えられたと、深く感謝いたします。

8年前三菱石油を退職してからは、出来るだけ多くのアメリカの人々に、日本で同じ様な体験をしてもらいたいと念じて、フルブライト・メモリアル・ファンドなどのボランティア活動に参加してまいりました。

丁度来年のフルブライト・プログラム50周年記念に向け募金運動が行われる大事な時期に、少しでもお役に立てれば光栄に存じます。

どうかこれから皆様方のご指導、ご支援をお願い申し上げます。

アドバイスやご意見をぜひ下記メールアドレスにお寄せください。

E-mail : fulbrite@d3.dion.ne.jp



編集後記



Publicity委員長

加藤幸男 KATO, Yukio

1990.At Large. International Education

サンフランシスコ平和条約締結後50年、これまでに日本と米国および諸外国との間に幾多の国際的な出来事がありましたが、学術的文化交流が常に主流を占めていたのではないかと思います。学術的交流は、何と云っても優れた人材の交流です。フルブライトは中でも最も立派な国際文化交流を生み出してきたのではないかと考えます。東京同窓会の諸活動およびこのニューズレターがそれらの国際文化交流の一助となればと考えております。

会員の皆様のさらなるご参加を得てより一層身近な会報と致し、たく願っております。

EメールにてE-mail ykato@staff.waseda.ac.jpまで皆様方のご意見、ご要望をお寄せ下さい。

ガリオア・フルブライト東京同窓会
〒102-0084 東京都千代田区二番町11-10
TEL : 03-3221-1841 FAX : 03-3238-0758